

豆狸の寝言

副会長 三原幸二

最近はじめた写真同好会の第1回目の撮影会が奈良で開かれた。集合場所である難波駅は、休日を楽しむ家族連れや若人であふれかえっていたがその中に混れてカメラを持ち、楽しそうに話しながら奈良行きの電車を待つお年寄りの集団があった。

広い奈良公園の紅葉は目を見張る程に美しく、心を穏やかにさせてくれる。絵を画く人、カメラをのぞく人、さまざまだがその中で私の目にとまったのは、生き生きとした老人の姿だった。

絵を画いている一人の老人に話しかけたところもう40年あまりの間、絵を画いているとのことだった。私は気持ちよさそうに、のびのびと筆を運んでいる老人の姿に心動かされる何かを感じた。

日本は人口の1/4が60歳以上になるという現実がまちかまえている。60歳といえは老境の入口の感がなきにしもあらずだが、私の出逢った奈良公



園のお年寄達はもっとももっとも高齢であるにもかかわらず、キラキラとした若者のような目で自然を見つめ、生き生きと余暇を過ごし、趣味を生活の一部として前向きに生きている様に感じられた。

真紅の秋の山々が私の心を動かしたのだろうか。久々にはつらつとした前向きなお年寄に出逢ったことで私は素直に感動し、心やすらぐ一日を過ごすことができた。

(ぶらぶら雑感) 1998年執筆